



シンポジウム 岡崎市歴史まちづくり 記録集



－ 目 次 －

2 頁	開催主旨
2 頁	プログラム
3 頁	出演者プロフィール
5 頁	開幕あいさつ
6 頁	第1部 事業紹介
12 頁	第2部 基調講演
25 頁	第3部 トークセッション/鼎談
35 頁	閉幕あいさつ
36 頁	アンケート集計結果

－ 開 催 概 要 －

日 時	平成 28 年 2 月 15 日 (月) 13 時 30 分～16 時 15 分
場 所	岡崎市図書館交流プラザ・りぶらホール
主 催	岡崎市都市整備部都市計画課・教育委員会事務局社会教育課

開催主旨

本市固有の歴史文化資産が織り成す「歴史的風致（歴史的な風情や情緒）」を守り、育て、未来へ引き継ぐべく、岡崎の個性を磨き、魅力を高め、市民一人ひとりが岡崎の歴史文化を再認識し、一層の誇りと愛着を持って継承していってもらえるよう、また訪れる人々に感動を与えられるようなまちづくりを総合的かつ一体的に推進し、地域の活性化、生活環境の向上、観光振興につなげるために必要なことは何かを考えます。



プログラム

13:30	開 幕	
13:35	第1部	事業紹介 岡崎市歴史的風致維持向上計画案の概要報告
13:55	第2部	基調講演 歴史文化資産を活かしたまちづくり ～地域活性化・観光振興につなげていくために～ 講師：デービッド・アトキンソン
15:00	休 憩	
15:10	第3部	トークセッション/鼎談 岡崎市の歴史まちづくりに向けて ～歴史文化資産を資源とする観光に必要なコンテンツとは～ コーディネーター：瀬口 哲夫 鼎談者：デービッド・アトキンソン、内田 康宏
16:00	閉 幕	

出演者プロフィール

基調講演講師・トークセッション鼎談者

デービッド・アトキンソン

小西美術工藝社代表取締役社長



1965 年イギリス生まれ。1983 年オックスフォード大学日本学専攻。1987 年卒業。1987 年アンダーセン・コンサルティング、1990 年ソロモンブラザーズ証券会社を経て、1992 年ゴールドマンサックス証券会社入社。1998 年 Managing director（取締役）、2006 年 Partner（共同出資者）となるが、2007 年退社。2009 年（株）小西美術工藝社入社、2010 年代表取締役会長就任、2011 年代表取締役会長兼社長、2014 年代表取締役社長、現在に至る。

1999 年 裏千家入門 現在 茶名「宗真（そうしん）」を拝受

2015 年～ 日本遺産審査委員会委員（主催：文化庁）

2015 年 5 月 京都国際観光大使就任

2015 年 9 月 山本七平賞受賞（PHP 研究所）

著書に「銀行不良債権からの脱却（日本経済新聞社）」、「イギリス人アナリスト日本の国宝を守る雇用 400 万人、GDP8 パーセント成長への提言（講談社+α 新書）」、「新・観光立国論（東洋経済新報社）」、「イギリス人アナリストだからわかった日本の「強み」「弱み」（講談社+α 新書）」

トークセッションコーディネーター

瀬口 哲夫

岡崎市歴史まちづくり協議会会長

名古屋市立大学名誉教授



昭和 20 年大分県生まれ。東京大学工学系大学院博士課程修了。豊橋技術科学大学建設工学系助教授、ロンドン大学都市建築学部客員研究員を歴任し、平成 14 年より名古屋市立大学芸術工学部教授、同大芸術工学部長を経て現在に至る。

専門分野は都市・地域計画で、近代建築など歴史的遺産を活かしたまちづくり、都市景観や土地利用を考慮した都市計画について研究を行っている。

平成 22 年度日本建築学会賞（論文）受賞、平成 24 年度日本都市計画学会功績賞受賞。

トークセッション鼎談者

内田 康宏

岡崎市長



愛知県議会議員を経て岡崎市長（現在 1 期目）

開幕あいさつ

岡崎市長 内田 康宏



皆様、こんにちは。岡崎市長の内田康宏であります。本日は、歴史まちづくりシンポジウムを開催いたしましたところ、多数の皆様方にお越しを賜りまして、厚く御礼を申し上げます。さて、本市は今年の7月に、いよいよ市制施行 100 周年を迎えることになります。この機会に、これまで育まれてまいりました多くの歴史文化が、現在の岡崎の礎になっていることを改めて認識いたしますと共に、本市固有の歴史的な文化資産を活かしたまちづくりを、更に推し進めるべく歴史まちづくり法の制度を活用いたしまして、国の重点的な支援を得ながら、計画的かつ積極的に施策を展開してまいりたいと考えておるところであります。

本日のシンポジウムにおきましては、歴史文化資産を活かしたまちづくりを、「地域の活性化、生活環境の向上、そして観光振興につなげるために必要なことは何か」につきまして、皆様方と一緒に考えてまいりたいと考えております。第1部では、現在、策定中であります、本市の歴史まちづくりの基本的な計画となります、岡崎市歴史的風致維持向上計画の案の概要につきまして、ご説明申し上げます。第2部の基調講演では、私も読ませていただきましたけれども、「新・観光立国論」の著者で、本市の六所神社を始めといたしまして、全国にあります文化財の修復を手掛けておられます「小西美術工芸社」のデービッド・アトキンソンさんをお招きして、「歴史文化資産を活かしたまちづくり～地域活性化・観光振興につなげていくために～」と題しまして講演をしていただくことになっております。大変、興味深いお話をお聞かせいただけるものと楽しみにしております。どうぞ、こちらの方もよろしくお願い申し上げます。そして、第3部のトークセッションでは、そちらには私も参加させていただきまして、アトキンソンさんと、本市の歴史まちづくりの協議会の会長をお願いしております瀬口哲夫先生との3者で、岡崎市の歴史まちづくりに向けまして、「歴史文化資産を資源とする観光に必要なコンテンツとは何か」ということにつきまして考えてみたいと思っております。

本日のシンポジウムを契機に、夢ある次の新しい岡崎に向けまして、誰もが誇りと愛情の持てる故郷・岡崎の歴史まちづくりへの関心や気運が一層高まり、地域の活性化や観光振興につながることを期待いたしまして、開催にあたりましての挨拶とさせていただきます。本日はどうぞ、最後までよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

第1部 事業紹介

岡崎市 都市整備部長 岩瀬 敏三

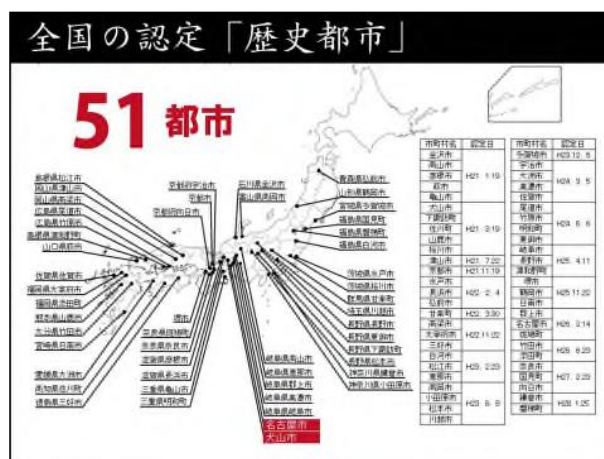


岡崎市歴史的風致維持向上計画案の概要報告

皆さん、こんにちは。岡崎市都市整備部長の岩瀬でございます。私からは、岡崎市歴史的風致維持向上計画（案）の概要につきまして、要点をご説明させていただきます。詳しい内容につきましては、本日、お手元に配布をさせていただいております「計画案の概要版」にてご確認いただければと思いますのでよろしくお願いいたします。

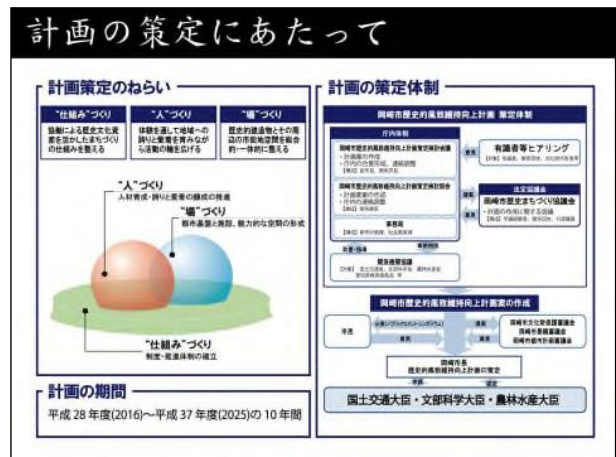
まず、はじめに計画策定の背景と意義につきましてご説明させていただきます。みなさんご承知かとは思いますが、本市は、古来より交通の要衝として、中世には源氏・足利氏の武家文化の重要拠点、近世には徳川家康公の生誕の地・岡崎城下町として栄えましたことから、戦災を受けてはおりますが、市内には今も数多くの歴史的な建造物や伝統行事などが受け継がれているところでございます。しかしながら、近年、少子高齢化等によります人口減少社会を迎えます中、歴史的な建造物におきましては、損傷や老朽化に対します維持管理の難しさなどから年々失われていくことが懸念されております。また、祭礼等の伝統行事などにおきましては、担い手不足等によりまして、いかに守り、伝え、発展させていくかが課題となっております。このような背景の中、本年、市制施行 100 周年を迎えますこの節目に、『夢ある 次の新しい岡崎』に向けまして、私たち市民一人ひとりが岡崎の歴史文化を再認識いたしまして、一層の誇りと愛着を持って継承できますよう、また、本市を訪れます方々に感動を与えられますよう、先人により育まれ、受け継がれてまいりました、数々の歴史文化資産を活かしたまちづくりを、国の重点的な支援を得ながら積極的に推進してまいります。そして、岡崎の個性をさらに磨き、魅力を高め、地域の活性化、生活環境の向上、観光の振興につなげてまいりたいと考えております。

国の重点的な支援を得て歴史まちづくりを進めるにあたりましては、歴史まちづくり法に基づ



きます「歴史的風致維持向上計画」を作成いたしまして、国の認定を受ける必要がございます。現在、全国で 51 の市町が、国から歴史都市として認定されておりまして、県内では平成 21 年に犬山市が、平成 26 年には名古屋市が認定を受けております。本市におきましては、来年度であります平成 28 年度の国の認定を目指しております。

計画の策定にあたりましては、「協働による歴史文化資産を活かしたまちづくりの仕組みを整える“仕組み”づくり」、「体験を通して地域への誇りと愛着を育みながら活動の輪を広げる“人”づくり」、「歴史的建造物とその周辺の市街地空間を総合的・一体的に整える“場”づくり」の 3 つのねらいがございます。計画の期間でございますが、国の認定を目指しております平成 28 年度から 37 年度の 10 年間としております。策定体制につきましては、市役所の内外の検討体制を整え、関係の審議会の意見も踏まえまして、策定を進めているところでございます。



文化財の特徴といたしましては、地方の一都市で中世の建築遺構を持つことすら稀なことと言われる中で、本市におきましては、中世の建築で国の文化財に指定されていますものが 8 棟ありまして、他の時代も含めると 13 棟にもなります。参考までに、国指定の建造物数では、県内におきましては犬山市が 14 棟、名古屋市が 11 棟でございます。このことから、岡崎市は、歴史的な建造物の遺構に大変恵まれた土地であるといえます。これら数多くの歴史文化資産のうち、歴史まちづくり法の対象となりますのは「歴史的風致」の要件を満たすものとなります。

岡崎市の文化財の特徴

地方の一都市で中世の建築遺構を持つことすら稀と言われる中、中世の建築で国の文化財に指定されているものが 8 棟もあり、他の時代も含めると 13 棟にもなる、歴史的な建造物の遺構に大変恵まれた土地です。

※県内の国指定建造物は、犬山市が 14 棟、名古屋市が 11 棟。

年代・種類	国指定	県指定	市指定	合計	割合
建造物	13	2	16	31	15
絵巻	6	8	37	71	0
彫刻	2	7	49	59	0
工芸品	3	9	42	54	0
歴史民俗文書	1	1	21	23	0
考古資料	0	2	2	4	0
歴史資料	0	0	4	4	0
有形民俗文化財	0	3	7	9	0
無形民俗文化財	0	2	6	8	—
史跡	3	3	24	30	0
天然記念物	1	2	30	33	0
合計	30	38	256	324	16

「歴史的風致」でございますが、地域におきましての固有の歴史や伝統を反映した人々の活動が、歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地を舞台として行われ、一体となって形成してまいりました良好な市街地の環境と定義されておりまして、平たく言いますと、ソフトとしての活動とハードとしての物や場が一体となって醸し出します歴史的な風情や情緒のことでございまして、建造物と活動が、それぞれ 50 年以上の歴史があるものが対象となります。



本市の維持向上すべき歴史的風致といたしましては、7つを整理しております。

一つ目は、徳川家康公の生誕地でございます
本市におきましては、ゆかりの社寺を始めとい
たしまして市街地を舞台に、年中行事や様々な
顕彰活動が展開されておまして、郷土への愛
着や誇りの源泉となります「家康公生誕の地に
みる歴史的風致」が形成されております。

岡崎市の維持向上すべき歴史的風致

01 家康公生誕の地にみる歴史的風致

徳川家康公の生誕地である
本市では、ゆかりの社寺を始めとする市街地を舞台に、年
中行事や様々な顕彰活動が展
開され、郷土への愛着や誇り
の源泉となる「家康公生誕の
地にみる歴史的風致」が形成
されています。



岡崎市の維持向上すべき歴史的風致

02 東海道を舞台にした信仰・祭礼等にみる歴史的風致

旧東海道を舞台に、各地に根付い
た秋葉信仰や祭礼等の伝統行事が、
松並木や常夜燈、一里塚、そして歴
史的な風情が残るまちなみなど当時
の面影を残す市街地と一体となって
歴史的な風情を醸し出す「東海道を
舞台にした信仰・祭礼等にみる歴史
的風致」が形成されています。



二つ目は、旧東海道を舞台に、各地に根付いて
おります秋葉信仰や祭礼等の伝統行事が、松並木
や常夜燈、一里塚、そして歴史的な風情が残ります
まちなみなど当時の面影を残します市街地と
一体となりまして歴史的な風情を醸し出してお
ります「東海道を舞台にした信仰・祭礼等にみる
歴史的風致」が形成されております。

岡崎市の維持向上すべき歴史的風致

03 滝山寺鬼祭りにみる歴史的風致

青木川流域の山間部の入口に位
置する滝地区の滝山寺を舞台に、
源頼朝の祈願に始まると伝わる鬼
祭りが、周辺の山並みや河川と一
体となって歴史的な風情を醸し出
す「滝山寺鬼祭りにみる歴史的風
致」が形成されています。



三つ目でございますが、岡崎の北部を流れます
青木川流域の山間部の入口に位置します滝地区
の滝山寺を舞台に、源頼朝の祈願に始まると伝わ
っております鬼祭りが、周辺の山並みや河川と一
体となりまして歴史的な風情を醸し出しており
ます「滝山寺鬼祭りにみる歴史的風致」が形成さ
れております。

岡崎市の維持向上すべき歴史的風致

04 岡崎城下の三大祭りにみる歴史的風致

岡崎城下であった市街地を舞台
に、形を変えながらも受け継がれ
てきた、菅生祭、岡崎天満宮例大祭、能見
神明宮大祭の三大祭りに、
伝統や往時の賑わいを見て感じる
ことのできる「岡崎城下の三大祭
りにみる歴史的風致」が形成され
ています。



四つ目は、岡崎城下でありました市街地を舞台
にいたしまして、形を変えながらも受け継がれて
まいりました、菅生祭、岡崎天満宮例大祭、能見
神明宮大祭の三大祭りに、伝統や往時の賑わいを
見て感じることであります「岡崎城下の三大祭り
にみる歴史的風致」が形成されております。

五つ目は、黒壁の蔵並みが続きます八帖地区を舞台にいたしまして、郷土の味であり、全国的にも名高い八丁味噌を伝統製法によりまして製造いたしております地場産業の営みが調和いたします「郷土食・八丁味噌造りにみる歴史的風致」が形成されております。

岡崎市の維持向上すべき歴史的風致

06 六ツ美地区の稲作儀礼にみる歴史的風致

市南部の矢作川左岸の平野部に広がる田園地帯に社寺が点在し、その周辺に集落が形成された風景を背景に、農作業や「御田扇祭り」「悠紀斎田お田植まつり」を行う人々の営みが調和する「六ツ美地区の稲作儀礼にみる歴史的風致」が形成されています。



最後になりますが、7つ目といたしまして、市東部の額田地区の山間部に広がります男川流域の社寺や集落を舞台にいたしまして、自然条件に適応しました個性あります民俗行事などを行う人々の営みが調和いたします「額田地区の山里のくらしにみる歴史的風致」が形成されております。

岡崎市の維持向上すべき歴史的風致

05 郷土食・八丁味噌造りにみる歴史的風致

黒壁の蔵並みが続く八帖地区を舞台に、郷土の味であり、全国的にも名高い八丁味噌を、伝統製法により製造する地場産業の営みが調和する「郷土食・八丁味噌造りにみる歴史的風致」が形成されています。



六つ目は、市南部の矢作川左岸の平野部に広がります田園地帯に社寺が点在しておりまして、その周辺に集落が形成されました風景を背景に、農作業や御田扇祭り、悠紀斎田お田植まつりを行っております人々の営みが調和いたします「六ツ美地区の稲作儀礼にみる歴史的風致」が形成されております。

岡崎市の維持向上すべき歴史的風致

07 額田地区の山里のくらしにみる歴史的風致

市東部の額田地区の山間部に広がる男川流域の社寺や集落を舞台に、自然条件に適応した個性ある民俗行事などを行う人々の営みが調和する「額田地区の山里のくらしにみる歴史的風致」が形成されています。



は、これら文化財の適切な保存と活用、そして、まちづくりとの連携を図る必要がございます。このため、文化財保護行政を担う教育委員会と、まちづくり行政を担う関係部局の一層の緊密な連携協力によりまして、総合的かつ一体的に歴史的風致の維持向上に関する施策や事業を効果的に実施してまいります。

重点区域内で実施いたします事業につきましては、歴史的風致を維持向上いたしますための「仕組みづくり」、「人づくり」、「場づくり」を念頭に、取り組みの底上げや拡充を図りますため、ハード・ソフト両面の各種事業を優先的かつモデル的に展開いたしまして、その効果を市全域に波及させてまいります。「歴史文化基本構想の策定」、「歴史学習教室の開催」、「案内人の養成」、「伝統的技術や活動継承の支援」、「岡崎城跡としての岡崎公園の整備」、「歴史的建造物の保存修理・修景、復元整備」、「無電柱化」、「道路の美装化」、「まちなみ景観整備」、「サイン・案内板整備」、「観光拠点施設整備」などの事業を想定しております。「重点区域」におきまして「歴史的風致」の維持向上を図る上で、必要かつ重要と認められる歴史的な建造物は、「歴史的風致形成建造物」として指定してまいります。

以上で、「岡崎市歴史的風致維持向上計画（案）」の概要につきまして、ご説明させていただきました。現在、3月5日まで計画案への市民意見の募集を行っております。ご意見やお気づきのことがございましたら、お手元の資料の最終ページ（14ページ）に記載しております担当課へご意見をお寄せいただければと思います。本計画でございますが、本年度末であります平成28年3月末までに最終案として取りまとめまして、4月以降に国へ認定申請をする予定でございます。限られた時間での概略のご説明でございましたが、ご清聴をいただきまして、ありがとうございました。

重点区域における事業	
取り組みの底上げや拡充を図るため、ハード・ソフト両面の各種事業を優先的かつモデル的に展開し、その効果を市全域に波及させていく	
01 歴史文化資産の調査研究と普及啓発の推進 □歴史文化基本構想策定事業 □郷土読本作成等事業 □歴史学習教室等事業 □案内人養成事業	04 歴史的建造物の周辺等における良好な市街地景観の形成 □無電柱化事業 □道路美装化事業 □まちなみ景観整備事業 □景観阻害要素除去事業
02 歴史や伝統を反映した活動の継承への支援 □無形民俗文化財等調査支援等事業 □伝統的技術・活動継承支援等事業	05 歴史文化資産を活かした地域活性化や観光振興の展開 □サイン・案内板整備事業 □観光拠点施設整備事業 □観光受入環境整備事業
03 歴史的建造物の保存・活用の推進 □岡崎公園（岡崎城跡）整備事業 □歴史的建造物保存修理・修景事業	□歴史的建造物復元整備事業

第2部 基調講演

デービッド・アトキンソン 氏



歴史文化資産を活かしたまちづくり ～地域活性化・観光振興につなげていくために～

小西美術工芸社について

デービッド・アトキンソンです。よろしくお願いします。最初に小西美術工芸社のPRをさせていただきます。小西美術工芸社という会社は、日光にある会社で、日光東照宮ができた時に創業しまして、日光東照宮と一緒に約380年間の歴史のある会社です。漆塗りや彩色、鍔金具といった業界の、国宝・重要文化財の大体4割くらいの職人を雇用しており、現在56名の職人を抱えています。文化財装飾業界で唯一全国展開しています。現在、岡崎市では六所神社の修理を手掛けています。他にも、京都であれば三十三間堂、伏見稲荷、大阪であれば住吉大社、九州であれば宇佐神宮、宗像大社、東北であれば平泉・中尊寺の金色堂など全国で数多く手掛けています。国宝・重要文化財の神社・仏閣の場合は80%の確率で、皆さんどこかで小西美術工芸社の仕事をご覧になっているかと思います。

小西美術工芸社とは

- 一、寛永13年(1636年)創業 今年で380年
- 一、総職人 56名
- 一、文化財修復業の日本最大手
- 一、全国の建造物漆塗のシェア40%

小西美術工芸社 岡崎市での施工実績

重要文化財 滝山寺 三門



重要文化財 六所神社 ※現在施工中



重要文化財 伊賀八幡宮 本殿・幣殿・拝殿・随神門 他



日本における外国人観光客誘致の潜在能力

2015 年の訪日外国人観光客数は 1,974 万人という史上最高水準を記録しており、おそらく今年は 2,000 万人を超えと言われています。ただこの実績は、日本は今まであまり観光に力を入れてこなかった国として、例えばタイの 2,400 万人や、外国人観光客数世界一であるフランスの 8,400 万人に比べて、非常に少ないところからスタートしていますが、それを今取り戻そうとしています。

5 6 0 0

外国人観光客誘致の潜在能力というものが別にあります。様々な手法で調査・分析しますと、現在の日本の外国人観光客誘致の潜在能力は、5,600 万人と言われています。この 5,600 万人は、諸外国と比べると世界第 4 位の観光立国に相当するものであり、挑戦的な数字というより逆に保守的な数字と認識していただければと思います。

国では、2010 年に外国人観光客 1,000 万人、2020 年に 2,200 万人、2030 年に 3,000 万人とする目標を掲げていましたが、潜在能力の数値を踏まえ、おそらく来年度辺りに国で戦略を作り、その目標を全部改めることになるかと思っています。

5,600 万人とする潜在能力の根拠の 1 つとして、観光を成功させていくための国家戦略などを調査・分析している、イギリスであればロンドン大学、アメリカであればコーネル大学といった世界の一流大学のデータがあります。

観光立国にするための条件

そのような一流大学の分析で示された、観光立国にするための条件は「自然・気候・文化・食」の 4 条件で、ここに隠れている言葉が「多様性」です。自然が豊かで、気候が温暖で、文化が豊かで、食が多様性に富んでいるということです。4 条件のうち 1 つだけは十分な条件が揃っているとは言えません。また各項目において、例えば自然では中々観光立国にならないことが確認されています。

4 条件を満たす希有な国、日本

- 一、自 然
- 一、気 候
- 一、文 化
- 一、食

例を挙げますと、フランスに毎年 8,370 万人の外国人観光客が訪れている一方、隣国のドイツとイギリスには大体 3,600 万人前後の観光客しか来ていません。隣同士であるのになぜそんなに大きな違いが発生するかというと、多様性の違いからなのです。ドイツには高い山はありますが、海岸線は北海にしか面しておらず、暖かい海に面している地域がありません。一方フランスには地中海に面している有名な海岸やビーチリゾートが幾つかあることで大体年間 2,000 万人くらいの観光客が発生していると言われています。イギリスの場合、気候についていえば、温暖な国で夏はさほど暑くならず冬もさほど寒くなりません。自然についていえば、高い山はなくスキーリゾートがありません。北海に面する海岸線は長いですが冷たい海に面しているためビーチリゾートがありません。フランスには訪れている年間約 2,000 万人のビーチリゾートの観光客と年間約 1,500 万人のスキーリゾートの観光客が居ないことになります。高い山や平地、暖かい海、冷たい海、降雪といった多様な自然や気候の有無によって観光客数に違いが生じているのです。文化についても、例えばタイのように極めて強い 1 つの宗派を中心とした仏教国ですと多様性に欠け、

一定数の人以上は来なくなる分、観光客誘致の潜在能力が下がります。

さて日本をみますと、北海道や沖縄もあれば軽井沢のように夏でも涼しい地域があるなど、自然が非常に富んでいます。気候も富み、暑くも寒くもなりますし、春や秋のように非常に居心地の良い季節があります。

文化の面で言えば、日本は海外から文化を取り入れて、自分達のものにして伝えていくということが言われています。これは日本の特徴だと言われているのですが、実は世界どこの国でも、海外の文化を取り入れて自分のものにするという傾向が確認されています。例えば私はイギリス人で生まれでカトリックですが、キリスト教はもともとヨーロッパではなくイスラエルでできた宗教で、ローマを介してイギリスに入ってきた宗教です。16世紀に英国国教会というものになりローマとは全く別のものになりました。これは1つの例ですが、こういう例が山ほどあります。では他国と日本の文化の違いはなにかと言うと、ヨーロッパを中心とした西洋の場合は新しい文化を取り入れる時に前の文化を消して入れ替える傾向が強いのですが、日本の場合、新しいものが入ると古い文化を残したまま新しい文化を加えるため学問的に見て多様性に富んでいると言えるのです。例えば、日本の民族衣装は羽織・袴であると言われますが、現在でもそういった民族衣装は消えていません。また言い伝えによれば、元々ユーラシア大陸にあった雅楽がベトナムを介して日本に入ってきて今もそのまま残されています。多く文化が残された分多様性が富み、観光において有利になります。

食についても同じように、和食だけでは中々観光立国にはなりません、日本では和食のみならず諸外国の洋食も非常に美味しく作られていますので、これも有利な条件になります。

192か国の観光受入れ国で、観光立国・観光大国となるための4つの条件が全部揃っている国は10カ国しかないと言われている中、実は日本がその1つに含まれています。このような要因を踏まえて日本の外国人観光客数の潜在能力が5,600万人と算出されています。

これまでの日本の観光戦略

今までは日本国民からの視点で日本が海外に対して何を発信するべきか、ということをベースに観光庁は観光戦略を実施してきました。主には、「YOKOSO! JAPAN」や「cool japan」、「おもてなし」といった戦略です。

たしかに、国民にアンケートを実施した観光庁のデータによると、海外に向けた日本観光のアピールすべき点として、72%が「おもてなしの国」とする回答結果が得られています。しかしおもてなしの良し悪しは別として（地球上に

生きる72億人全員が日本の「おもてなし」に対し同じ価値観を持ってもらえるとは思えませんが）、一番の問題点は、そもそも「おもてなし」を観光の主たる動機にする外国人がどのくらい存在するかということです。先ほどあげた一流大学の分析データによると、おもてなしを動機とした観光は確率としては0.00%です。おそらく日本人も同じだと思いますが、海外旅行する時に、「ある国のおもてなしがどうも凄いらしい」という理由で観光する国を決めた人は、全国で講演会をさせていただいてありますが、今まで会ったことがありません。ですから「おもてなし」はあるに越したことはないです

不十分条件

- 一、オモテナシ
- 一、治安
- 一、公共交通機関のダイヤの正確さ 等

が、それを目当てにお金を払って自分の時間を使って行く人は、原則居ないと考えてもいいのではないかと思います。

治安も同じことが言えます。今までの観光 PR の 1 つとして、日本は世界一、安全・安心な国であるということを掲げてきました。確かに先進国では日本は世界一治安が良い国です（小さい国まで入れると世界一治安の良い国はアイスランドです。それは人が住んでいないからだだと思いますけれども）。治安が悪い場所を観光しないとは思いますが、一定以上治安が良いという理由だけで観光客が来ると考えるのはちょっと違うのではないかと思います。実際、世界一の治安が良いとされるアイスランドに観光する人は去年は 80 万人だけでした。ですから治安が良いことに越したことはありませんが、それを動機にして、例えば大体 30 万円掛かけ 14 時間飛行機に乗り、ヨーロッパから日本に来て観光する人は中々居ないと思います。

同じように、新幹線の運行時間が非常に正確であることや、街にゴミが落ちていないといったことは全て事実ではありますが、住民目線の良さであり、観光客の目線に立った観光 PR ではないと思います。あるに越したことはないですが、こういうものは余りアピールしない方が良いのではないかと思います。

日本における観光産業の意義

そもそも、現在なぜ観光産業を推進する必要があるのか、なぜ総理大臣まで観光産業を徹底的に開発していくと言いつたのかを考える必要があるかと思います。まず、観光業がどれほど大切な業界なのかということです。

2 年前の 2014 年では、世界の GDP の約 9 % を観光産業で占めています。おそらく去年の 2015 年で 10 % を超えた可能性があると言われてい

ます。地球の労働者の 11 人の内 1 人が観光産業で働いています。外貨が支払われるため、国内で消費がされますが、輸出業に含まれます。輸出額の 6 % を観光産業が占めており、サービス産業における輸出額の 30 % を占めています。3 年前は 25 % でしたが、現在 30 % まで増えています。観光客は、1950 年は 2,500 万人ぐらいでしたが、2014 年には 11 億 3,300 万人まで増えています。毎年々々増えており 2030 年までには 18 億人に増えると言われてい

ます。既に去年の時点で、世界第 4 位の基幹産業になっていまして、あと 3 年間で世界第 3 位の基幹産業になると言われています。

最近、観光業の推進に対する意識が高まってきていると思います。観光産業を推進する意義に、人口減少社会における国の経済力が密接に関係しています。その理由として経済について取りあげますと、経済の指標である GDP の順番は、1 番目がアメリカ、中国は最近 2 番目になりましたが先進国に着目しますと、2 番目が日本、3 番目がドイツ、4 番目がイギリス、5 番目がフランス、6 番目がイタリアです。

多くの場合、特に日本国内のマスコミを中心とした考え方によると、GDP の順番は人種の違いに由来すると解釈されていると思います。要するに、アメリカはどんどん色んな人が入ってくる国で、起業家を中心とし、色々なアイデアを出す国と言われてい

世界の観光産業

- 一、GDP の 9 %
- 一、雇用の 11 人に 1 人
- 一、輸出額の 6 %
- 一、サービス業輸出額の 30 %
- 一、2014 年 11 億 3300 万人 国際観光客 (+4.3 % 増)

が高いと言われています。

しかしこういうことは事実ではありますが、決定的な要素ではありません。実はGDPの順番というのは、人口の多さの順番なのです。1番目のアメリカは3億1,200万人の人口がいます。2番目の日本は1億2,700万人弱。3番目のドイツは8,000万人強。4番目のイギリスは6,700万人弱。5番目のフランスは6,500万人弱というような順番です。先進国において、経済の大きさと人口の多さの相関は100%一致しています。

日本の場合、戦後1973年まで人口が急増したことに加え、平均寿命が非常に延びたことにより人口は戦後から現在まで1.8倍増えています。それに対してアメリカを除く欧州の場合、1.2倍しか増えていません。この人口の増加が経済へ非常に大きく貢献していました。

問題は、今後人口が増加せずまた寿命をこれ以上に大きく延ばすことはできないと仮定すれば、急上昇した分だけ急降下が起きるということです。急降下する時代がこれからの時代です。東京や名古屋辺りはさほど人口が減らないとすれば、一般的に言われているように地方の人口が激減します。地方の人口が激減した分だけ、なにも対策を打たなければGDPが減ります。神社・仏閣の修理を担当する小西美術工藝社として計算をしますと、なにも対策を打たないとすれば日光東照宮の収入は、30年間で60%減ることになります。それでは日光東照宮を支えることができません。これまで日本は国をあげてインフラを造ってきたにも関わらず、それを使う人が激減してきます。これから人口を増やすとしても、子どもが消費者になるには15~20年ぐらいかかるので間に合いません。かといって、移民を増やすのも中々難しい。そういった状況の中、残された対策は短期移民、要するに観光客です。短期的に来て消費してもらうことによって、減少した日本人の消費者の分を補うこと、それが日本における観光の意義であると思います。

世界の観光業の中での日本の位置

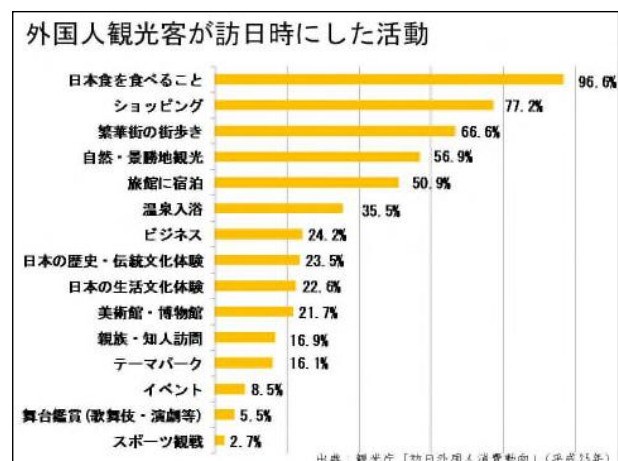
今までの日本の立場として最近の実績を見てみますと、まだ2015年のデータがまだ出ていないため2014年のデータですが、日本への観光客数は1,340万人で、人口550万人の東京都世田谷区程の人口しか居ないシンガポールより多少多いぐらいの人数です。訪日客数が2,000万人に増えたとしてもアジアの中では第5位です。香港は1つの島だけで2,800万人の観光客が来ていますので、さらに伸びしろがあると考えられます。

国際観光客到着数					
世界トップ10			アジアトップ10		
国名	(百万人)	前年度比(%)	国名	(百万人)	前年度比(%)
フランス	83.7	0.1	中国	55.6	-0.1
米国	74.8	6.8	香港	27.8	8.2
スペイン	65.0	7.1	マレーシア	27.4	6.7
中国	55.6	-0.1	タイ	24.8	-6.7
イタリア	48.6	1.8	マカオ	14.6	2.1
トルコ	39.8	5.3	韓国	14.2	16.6
ドイツ	33.0	4.6	日本	13.4	29.4
英国	32.6	5.0	シンガポール	11.9	-0.3
ロシア	29.8	5.3	台湾	9.9	23.6
メキシコ	29.1	20.5	ベトナム	7.9	4.0

出典：国連 2014年

日本で5,900万人を実現していくためには、幾つかの課題があります。最大の問題点は、誘客対象の多様化です。観光産業に関しては、何を切り口にしても必ず多様性の問題が大切です。現在インバウンドの外国人観光客の国籍についても言えることで、1つや2つの国に頼ると余り良いことはありません。できれば沢山の国の人に来て楽しんでもらえることがポイントの1つになります。2014年は訪日外国人観光客のうち85%が台湾、中国、韓国といった近隣諸国からの観光客が中心となっており、2015年はさらにその割合が増加しています。

出発国・日本間の距離と消費動向の関係



左の図表は、外国人観光客が訪日時になにをしているのかという観光庁データです。「和食を食べること」が96.6%ですが生きていくために1日3回必要な行為ですのでそれ以外では、「ショッピング」が77%、「繁華街を歩く」が67%になっており、あまり多様性が確認できません。ちなみに「日本食を食べること」を観光庁は割と自慢していますが自慢にはならないと思います。なぜかと言いますと、生きていくために1日3回必要な行為であり、食事が美味しいと言われていない

私の母国のイギリスでもこの数字は99.7%です。おそらくどこまで不味いのかを確認するためかもしれませんが、残りの3.4%の人は一体何を食べてるのかと思います。フランスではほぼ100%です。

ただ一番着目すべきポイントは、「日本の生活文化体験」や「日本の歴史・伝統文化体験」が大体25%ぐらいしか居ないことです。それは誘客対象者の違いに起因します。爆買い目的で日本に来る観光客は今日日本の整備されている環境を使っている人達です。要するに、東京や大阪で買い物する場所で整備されているまちなみを使うことでこの観光が十分にできおり、ある意味で大きな課題が表面化しているのではないかと思います。どこの国であっても近隣諸国の観光客が多い傾向がありますが、アメリカでは外国人観光客のうち大体半分が近隣諸国からです。中国人を減らすというのを決して申し上げている訳ではありませんが、それ以外の国から来てもらわないと困るということです。

特に近隣諸国の観光客は、文化・歴史を中々消費しない傾向が全世界に確認されていますので、遠方の国から来る観光客を沢山呼ぶ必要があるということがこれからの課題です。一般的には、遠い国から来た観光客は「上客」と言われます。それは先進国から呼ぶようなことを意味するものではありません。例えばフランスにとっての上客はアジア人で、フランスの近隣諸国の人達は爆買いの傾向もかなり多くあり、余り上客だと言われません。どのぐらい遠いかということが非常に重要で、近隣諸国の観光客も大切ですが遠方の国から来る観光客である上客を呼ぶ必要があります。

観光客の多様化

- 一、日本は80.7%の観光客はアジアから
- 一、米国は近隣からは55%
- 一、遠い国からの観光は稼げる

その理由は2つあります。1つ目の理由は、遠い国からは来るための交通費の予算が高くなり、その分だけ所得の高い人を中心に観光するということです。例えば中国人が日本に旅行する時に使う予算は大体23万円である一方、アメリカに旅行する時に使う予算は66万円です。2つ目の理由は、これが極めて大事なポイントなのですが、遠い国から来た人は長く滞在するということです。観光産業の最大のポイントは滞在日数です。来てもらえば良いということではなく、アメリカのデータによりますと旅行の予算の26%がホテル、19%が食事と、45%の予算が泊まることによって発生しています。ですから、1日でも長く滞在してもらうことが最大の秘訣です。そういう意味で考えた時、今後の課

題は、特に富裕層など多様な人を対象とした滞在環境を整えることです。ビジネスマンにとってはシャワーとベッドがあれば十分だとは思いますが、海外を旅行する時はビジネスと違い、自分の住む環境より少なくとも同じぐらいかできればちょっと上の環境を望む人が殆どなのです。

日本の観光業の課題

この間紅葉の時期に、海外からあの有名なビル・ゲイツが京都に行きたいという話で、ホテルに困っているとの相談をされました。ビル・ゲイツは、5年間の収入でアメリカの国債を全部償還ができると言われている人です。京都で紅葉の時期ですので、ホテルは実名で申し訳ないのですが、APA ホテルしか空いていませんでした。ビル・ゲイツは流石に APA ホテルには泊まらないと思います。それでも3万6,000円もしてました。ホテルの問題がかなり大きいのです。日本の場合1泊

の平均が1万1,000円で、海外の先進国の半分くらいの価格です。安い高いかということではなく、多様性に富んでいないということです。ビジネスホテルは沢山あるのですが、それ以外のホテルが余り整備されていないと言えらると思います。世界一の高いホテルの部屋は1泊600万円します。それが72億人を対象にしているスイスのホテルであるため365日にわたり600万円を払ってくれる人は居るとされています。一方今まで日本の観光産業では主に1億2,700万人の日本人を対象とした国内向けで、なおかつゴールデンウィーク・お盆・お正月しか稼働しないので、結局は365日600万円払ってもらえるような人が居ませんでした。分母となる人が居なかったためそのような部屋のあるホテルはできていないのです。600万円するホテルを1つ造れば日本が観光大国になる訳ではありませんが、600万円・500万円・400万円、1万・2万・3万・4万・5万いったところから始め、多様な価格帯のホテルの整備が必要です。

ビーチリゾートについて言えば、世界の中で有名な日本のビーチリゾートがありません。沖縄は少しずつ良くなりつつありますが、ハワイのような海外の有名なビーチリゾートまでは整備されているような状況ではありません。

スキーリゾートも同様の課題があると言えます。日本は有名なスキー場は沢山あり雪の質が世界一だと言われており、そういった評価は非常に高いです。問題は、外国人が書き込んでる口コミサイトを検索していただければすぐ分かりますように、「雪の質が最高です。非常に昼間、楽しんでいました。5時になりますと、悲しい曲が流れて、帰きなさいということで、夜の楽しみが何もなく、3日位であまりにも退屈になってしまったので帰りました。」とされています。それは事実だと思いますが、ニセコでは次第に整備していますように設備投資をして直すだけの話ですので、できる・できないという話ではないと思います。

別の課題は岡崎市にとっても非常に重要である文化財の整備についてです。今までは文化財行政は文化財の保護を中心としたものでした。多分皆さんも文化財を見てまわると感じるでしょうが、実際には殆ど空っぽの建物がある場所にポツンと建っているだけです。保存はされていますが楽しめる様な場所ではありません。

今後の課題

- 一、ホテル
- 一、ビーチリゾート
- 一、スキーリゾート
- 一、文化財の整備
- 一、イベントの充実

文化財の利活用の推進—定期的なメンテナンス

文化財の保存・活用を表す象徴的なものは文化財予算です。平成 26 年度のデータですが、日本における文化財保存修理予算は 81 億 5,000 万円であるのに対し、日本の GDP の半分位しかないイギリスは 500 億円です。日本人一人あたり文化財にかかる費用は 63 円である一方イギリスは 785 円です。修理をあまりしないため、当然ですが綺麗な状態にはなっておらずさほど楽しめません。投資してない分だけリターンである観光客は来ません。

日本と英国の比較

	日 本	英 国
保存修理予算	8,150 百万円 概算年度	約 500 億円
GDP (2013 年)	478 兆円	269 兆円
保存修理予算対 GDP 比率	0.0017%	0.019%
人 口	1 億 2,712 万人 435.3 歳代	6,370 万人
1 人あたりの修理予算	63 円	785 円
観光客数 (2013 年)	1,036 万人	3,117 万人
観光客対 GDP 比率	2.3%	8%
雇 用	187 万人	310 万人
文化財訪問率	23.5%	80% 以上
指定文化財の数	2,426 件 (4,695 種)	約 12,500 種

こういう主張をすると、「アトキンソンさん、日本は侘び寂びだから、そんなピカ綺麗にするもんじやない。」と言われることがあります。日光東照宮がある日光の場合、珍しく 1 つの山に輪王寺と二荒山神社もありますが、この 2 社 1 寺と言われる 1 つの山の中で、110 棟の国宝文化財が集中しています。

この地域に対する国の補助金の予算は京都府全体の予算と殆ど同額なのですが、実際には右上の写真にあるような状態です。眠り猫の手前にある建物なのですが、修理の予定はありません。角のところを見ますと漆が剥がれています。漆の唯一の欠点は紫外線に弱いことで、放っておきますと特に南西のところなど、漆がなくなってしまいます。漆はそもそも建物を綺麗にみせるためではなく木を保護するために塗っているので、なくなると湿気が多い日本ですからどんどん木が腐ってしまい



ます。この写真を撮る前に外しましたがお鍋 1 杯分ぐらいのキノコが生えていました。加えて観光客の手が届く位置にあるためつつかれています。このような状態になってしまうと 380 年間の歴史が消えてしまいますが、切り取って取り替えるしか方法がありません。これを保全していくためにはそんな大した予算ではなかったのですが、観光の考え方がなかったのです。文化財は倒れなければいいという考えから屋根工事と躯体工事が基本になっており、文化財が綺麗な状態にあるかどうかというのは、あまり気にされていませんでした。

今年から綺麗な状態に見せているかどうかという問題が考慮され始め、文化庁の予算も少し増えました。ただ問題はそれだけではありません。日本社会がどんどん変わり、家庭から古典的な日本文化がなくなってきています。小西美術工芸社は文化財修理をするための会社ですが、文化財を守る職人の文化は、日本文化のピラミッド状態で一番上の筈だったのですが下から崩れてしまっています。

メンテナンスをせずそのまま放っておくと、観光客が激減していくという 2 番目の打撃がきます。観光客が激減することにより文化財の所有者の財政状況はどんどん悪くなり、さらに修理が難しくなります。今までは人口が激増してきたので観光客や修学旅行生はある程度来ていました。その分だけ毎年々々何もせずとも収入は増えてきました。しかしこのまま放っておきますと逆に、事実もう既に、

減り始めています。

減少する入場者数への対策としては、リピートしてもらうことや外国人に来てもらうこと、単価を上げることです。各3つの戦略、もしくはこの3つを合わせた戦略が必要になって来ます。

文化財の利活用の推進—解説、展示の充実

ただ今までの日本の観光業の考え方は、「日光、一度も見ぬ馬鹿、二度見る馬鹿」という言葉があるように、1回来れば良いという考え方でした。それを反映して、もしくは、それが原因となって、文化財というのは楽しめるようなものではありません。しかし家庭から古典的な日本文化がなくなっている今（文化財にしか古典的な日本文化は残っていないのではないかと思います）、文化財を日本文化の大学にしてはどうでしょうか。つまり建物に人や文化を取り戻し、文化財で展示や体験をしてもらってはどうかと考えています。

文化財の利活用の推進

- 一、解説、展示の充実
- 一、定期的なメンテナンス
- 一、入場料の考え直し
- 一、モラルハザードの解消
- 一、文化財指定制度の再考
- 一、整備の応援

そのための一番のポイントは展示の仕方や解説です。皆さんそうだと思いますが、博物館へは常設展には2度は行きませんが、特別展にはリピートしより高くお金を払います。なぜかと言うと新鮮で、面白いからです。この間下村元・文部科学大臣の視察に同行して岐阜城に行きました。新幹線から降りると岐阜城のアピールはどこにもなく、そもそもどこにあるのかというのも、表示していませんでした。岐阜城の目の前には大きな案内板がありました。その案内板では織田信長の生涯ということで、何年に生まれて結婚し、何人の子供がいるとかということが書いてありました。しかし日本人はともかく基礎知識のない外国人からしてそもそも織田信長が一体誰か分かりません。その辺の人かも知れない人のそういった情報は自分には関係ないと受け取られると思います。もう1つありました。岐阜城だけあって立派な甲冑が置いてありました。兜もあの時代の物ですから江戸時代みたいにマニュアル化された物ではなくて、非常に個性豊かで立派な物が沢山置いてありました。しかし、その兜の隣に書いてある説明には、「兜」、その下に「HELMET」。その隣の兜もまた「兜」、その下に「HELMET」。右側に行きますと日本刀が置いてありました。そこに書いてあるのは「日本刀」、「SWORD」。それしか書いていないのです。30万円を掛け、14時間を掛け、自分の有給休暇を使い、遠い国から来た人に対して折角興味を持ってもらったのに、「日本刀、SWORD」という程度の解説は、あまり親切だとは思えません。

同時にそれだけの解説では滞在時間を長くさせることができません。案内や解説の設置は丁寧に説明する目的もありますが、何より大事なことは1時間でも2時間でも長くそこに滞在してもらうことです。すると日帰りは止めた方が良いということにつながりより長く滞在してもらえということが、一番求められるポイントです。そうすることで歴史を伝授することができますし、案内する仕事も発生します。

文化財の利活用の推進—入場料の見直し

入場料も考えた方が良いでしょう。桂離宮の入場料は無料です。日本国内の国宝・重要文化財の入

場料の平均は 593 円です。一方海外の主な施設の入場料は 1,891 円で約 3 倍です。ただし、色んなことを説明し、体験させるため満足度合いが違います。

これまでの行政は、主に建物をみせ梁などについて展示していました。静岡市にある駿府城は櫓を復元していますが、建物の中は全部空っぽです。姫路城も空っぽです。理由を聞きますと、文化財の設計や管理、修理をする文化財行政職員は建築を専門とするが多く、梁や組み方を見せたいという意図があるそうです。そのため「建築の妙」だけを見せるような展示となっているのです。



しかし、繰り返しになりますが多様性が重要です。多様性が重要ということは、梁や組み方に関することだけではなく、建物の意味合いやそこで実際にあった歴史的事件、そこに住んだ人物の歴史などを紹介するべきです。

そういう主張をすると、そういったことは勉強してこい、とよく言われます。しかし 30 万円を掛けて 12 時間を掛けて来た人に勉強してこいとは流石に言えないと思いますし、日本人に対しても不親切だと思います。

自分が日本で一番好きな場所は京都の二条城です。オックスフォード大学日本語学部で歴史を沢山勉強した中で、明治維新の時代に非常に興味を持って勉強しました。日本に来た時にどうしても大政奉還の現場であった二条城に行きたいと思っており、行きました。そしてこの間も久しぶりにもう 1 回行きました。二条城の部屋は、大政奉還ですから近代日本が始まったところです。軍艦島だとかいうところではない。京都における公家文化と武家文化の違い、京都に江戸幕府の象徴として建てた理由、そもそも江戸幕府とはなにか、天皇制と幕府との関係は明治になってどうなったのかなど、やろうと思えば 1 日位でも足りないぐらいの歴史があります。朝廷との関係で最高の技術でその二条城を造っていますので、お庭や建物、装飾などやり出せば全面的に色々なことを解説できます。

しかし、「新・観光立国論」などで私が余りにも二条城を責めたことによってか最近案内板が増えて来ましたが、大玄関から上り目の前に現れる「遠侍三の間」の案内板には、最近まで漢字で「三の間」と書いてあり、その下にローマ字で「SAMNOMA」と書いてあるだけです。そして空っぽの部屋です。襖も外してあります。廊下を歩くだけで、説明するガイドは居ません。何もないのです。「SAMNOMA」は横文字であっても外国人からすると、英語にはなっておらず何も伝わりません。大政奉還というとてもない歴史が秘められている部屋であるはずの大広間にある解説は、大体 1 分足らずのちょっとした解説が流れる機械が置いてあるだけで、しかも今の時代にあって初来日した 30 年前と全く同じテープの機械なのです。

このような場所では、細かく聞きたい来場者のためにその分だけ支払ってもらって学芸員と一緒に廻り、部屋には人が居たのですから実際に部屋に入って座ってもらって本来の目線で、大政奉還後の侍の服装の変化や、部屋の意味合いなどを説明してもらおうということが、あるべき姿であると思います。建物に価値がないということを申し上げている訳ではありませんが、梁や廊下の特徴はある意味でどうでも良く、そこにあった何百年間の歴史の方がよほど価値があると思います。遠い国から来たお客様を自分の家に呼んで、接待した時にお茶も食事も出さず、調度品や家具を全部取り外した部屋でその人に「この天井が凄いでしょ」と言い、帰らせるのかということを考えていただきたいと思いますが、普通はそういうことしません。本来は、生け花の国である以上は生け花が立花として、あの

部屋に常に飾っている筈です。そこに当時の装束を着た人が居て、装束とはどういう物か、後の羽織・袴とは何が違か、そもそも二条城でなぜ中袴を履いているのか、といったことを説明するべきです。そうした取組みにより、初めて観光大国になるのではないかと思います。神社においても、我が小西美術工藝社でよく関わりますが、神社に来る人が何を知りたいかといえば、どの神様なのかということや、造りや飾りの意味が知りたいのです。

二条城に話を戻します。一言相談してもらえれば良かったのに、新しい案内板が勝手に作られてしまいました。案内板には、「遠侍三の間は、待合室として使われました。」とありその続きが駄目なのです。続きには「壁画に、竹と虎が描かれています。」とありました。これは見れば分かることだと思います。流石に残念で、日本的なやり方だなあと思いました。誰が何の絵の具を使って描いたかは一部の人には重要ですが、一般の人からするとそうではなく、日本文化の中で日本人にとって竹と虎を描く習慣はどのような精神的な意味合いを持つのかを説明することがポイントです。このポイントを外れています。二条城の中には虎や鷲、大きな松など沢山描い



てあり、外様大名から譜代大名を待たせる空間を進んだ先の御三家が入る空間では、桜など非常にのどかな風景が描かれています。絵により、敵に対しては威嚇することが、また御三家に対しては仲間であることが表現されています。小西美術工藝社の社長ということでこういった説明を丁寧にしていただきましたが、通常観光客に対してそのような説明はしていません。これは勿体ないことで、ここには非常に価値があります。

文化財は、造りの特徴や創建年、国宝なのか重要文化財なのか、県指定文化財なのか市指定文化財なのか、といったことは一般の見学者の側にとっては歴史として捉えるためどうでも良い情報です。この建物は国宝だから見るべきものであって、隣の建物は指定されていないからどうでも良いというような価値の位に関心を持つのは建築家や専門家目線です。これを改めるべきではないかと思います。

日本の観光でアピールするべきもの

私がこの仕事をやり出したきっかけでもあるのですが、文化財との関わりが非常に強い小西美術工藝社の社長として、2年前に日本の観光戦略であった「cool japan」に関しスピーチをして欲しいと依頼されました。あの時日本の「cool japan」戦略は、「アニメ・漫画・AKB」でした。しかし日本という国を「アニメ・漫画・AKB」だけで説明ができる筈もないことや、何のために2600年間続いている国かということ、観光戦略に伝統芸能・伝統技術・文化財・日本の歴史といったことが入っていないのは観光庁としてどうなのかということなどを意見しました。するとある有力な政治家の方から、それならば責任を持って観光の本を書き、ちゃんと文化財のアピールをしなさいと言われ、この講演に立つこととなりました。要するに、ある部分だけは観光大国は成り得ないのです。オール・ジャパンでないと。ホテルを始めさまざまな取組むべきことがあると思います。

ただ一番伸びしろのあるのは、実は日本の伝統文化、歴史と文化財だと私は思います。なぜかと言いますと、日本人でさえ全然日本文化を知らないとか興味がないと言われており（興味がないのは受ける側の若い日本人の責任ではなく、教えるべき側の責任にあると私は思います）、興味がない文化財を維持することは難しいし、これまでのように継続的に維持して行くことが難しくなると思います。



そろそろ、所有者や行政などが日本の歴史や文化、文化財を全面的に、そして隠れている良さを直接的にアピールする時代になっていると、考えています。そういった取り組みが文化財を維持するにつながります。

日本国内では、定住人口である住民がいなくなるため交流人口である観光客を呼ぶべきだという考え方がありますが、例えば沖縄のように、観光客を呼んでも住民が居なければ、観光客に対応することができません。しかし観光客を呼ぶことで、雇用が生まれるため地方創生がその地域

に起きます。私の出身であるイギリスの田舎はとんでもない田舎なのですが、一時期あった3万人の人口が2万人まで減りました。しかし1980年代に入りやっと観光戦略に力を入れ今は4万人弱です。日本と同じように「消滅していく自治体」ということを言われた地域でしたが現在繁栄しています。ですからこういうことも日本の地方には、時代の変化の中で求められているものではないかと思えます。

「ものづくり」は大事ではありますが工場の時代が主に終わったサービスの時代では、地元にどういう魅力を作って発信することができるかということが大事になります。例えばアメリカのラスベガスはカジノとして有名ですが、1900年には人口が3人だったそうです。しかし色々なことを考えて、設備を作り、カジノはどうか別として世界を魅了するような場所とすることができたのです。このように全部工夫次第なのです。

日本遺産という新制度ができましたが、文化財を凍結保存するだけではなくストーリーを作り活用していくことがこれからの時代に必要であるとしてとして、下村大臣を始め何人かと一緒に議論した結果できた制度ですので、これにも大いに期待しています。

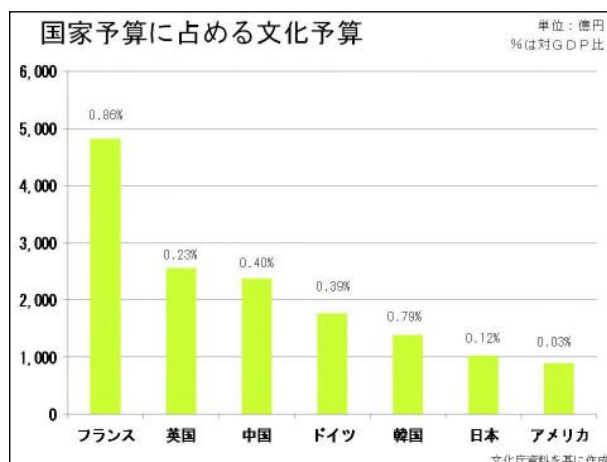
2030年の目標と課題

日本の文化庁の予算は1,000億円程度で、文化のないアメリカと殆ど変わりません。また韓国が日本のGDPの半分位しかないのに、文化予算は韓国が上です。この問題も直すべきです。ただそういうものは課題に過ぎませんので、直していけば良いだけの話です。

冒頭で申し上げましたように、2030年には地球上の観光客数は18億人まで増えると予想されています。その時には今日本の5,600万人とされる観光客数の潜在能力が、8,200万人になります。



す。8,200万人の中で、東南アジア・近隣諸国からは大体半分ぐらいの4,000万人位と予想されてます。世界最大の観光客のマーケットは実は欧州で、18億人のうち、5億7,500万人が欧州発の観光客とされます。アメリカは1億9,000万人位ですが、9,000万人がアメリカの中やメキシコ、カナダに行く人達であるため、余り大きなマーケットでなく、実際には1億人位しか居



ないのです。

このように国は大きいのですが実際には観光客は動いていませんので、これからの課題はアジアと欧州の2つをどうするかということです。日本の潜在能力の8,200万人のうち、近隣諸国・アジアから4,000～4,200万人位だと思います。その他オーストラリアや主に欧州、アメリカから残る4,000万人位を狙うべきです。近隣諸国の観光客はどうしても爆買いや食事だけになりがちですが、遠い国から来た観光客は、歴史・文化に関する観光や地方を観光すると思いますので、今後は遠い国を中心に観光戦略を実行していくべきではないかと思います。ご清聴、ありがとうございました。

第3部 トークセッション/鼎談

コーディネーター

瀬口 哲夫 先生

鼎談者

デービッド・アトキンソン 氏

内田 康宏



岡崎市の歴史まちづくりに向けて ～歴史文化資産を資源とする観光に必要なコンテンツとは～

瀬口先生

基調講演では、日本は観光客誘致のポテンシャルは非常にあるが、まだ十分活かしきれていないのではないかということなどに関して具体的に話いただき、参考になることが多かったと思います。

日本についてのお話でしたが、岡崎市に置き換えて考えることができるか、ということが1つのテーマになろうかと思います。第1部の岡崎市歴史的風致維持向上計画案の概要報告では、岡崎市には文化的なことや歴史的建造物が非常に沢山あり、これを活かすべく色々な政策を考えているということでした。

先日土曜日に新東名高速道路が開通しまして、岡崎城の来場者は1年間で大体10万人位ですが、岡崎サービスエリアには半日位で2万7,000人位のお客さんが来たそうです。刈谷のハイウェイオアシスの来場者数が約800万人で、2014年日本遊園地・テーマパーク入場者数ランキング4位となっている例があるように、高速道路の影響は非常に大きいと思います。その点で岡崎市は日本の中心にあり交通条件が整っていると思います。基調講演では観光立国の条件として多様性が重要とのことでしたが、まず市長さんに岡崎市の歴史、文化を活かしたまちづくりの展望について、お話をいただきたいと思います。

内田市長

岡崎市周辺の地域はトヨタ自動車の中核とした自動車産業や機械産業といったものづくりで栄えてきたところですが、岡崎市を改めて眺めてみますと、大変歴史の古い地域で、多くの歴史的な資産に恵まれています。神社・仏閣等は京都と並ぶ程の数があるとも言われていますし、大化の改新の頃には既に集落があったと言われています。

今までも、観光に力を入れてこなかった訳ではありませんが、本格的に観光産業に育てる様な方向や取り組みはなかったように思います。どちらかと言うと、興味がある方に見に来てもらえばいいという施設が多いと感じています。岡崎城では観光バスの駐車場は十分ではありませんし、大樹寺や滝山寺、伊賀八幡宮といった重要な施設でも、観光バスで周遊するような制度ができていません。そのた

めまずは、駐車場や交通の整備といった基本的なことから取り組むべきではないかと考えており、私が市長になりましてから進めて来たところです。

そして、岡崎市にはまちの真ん中を矢作川、乙川という大きな川が流れていますが、こうした河川の空間は歴史的な資産と共に、まちの財産の1つではないかと考えています。例えばヨーロッパの川がある都市では、川を上手に使ったまちづくりを行っています。もちろんヨーロッパとアジアで事情は異なりますが、日本なり工夫したに川を使ったまちづくりと歴史的な資産を活かしたまちづくりを行っていこうというのが、私が市長に立候補する時から、そしてまた今日まで続けて来ているメインテーマの1つです。

瀬口先生

今、市長さんから駐車場に力を入れるとありましたが、東京のような大都市とは異なり地方都市は、移動の足となる交通の整備が中々難しいと思います。しかし、岡崎市の中心部には沢山の文化財や川といった資源があるとのことでした。

基調講演にありました様に、これまで文化財は保護が中心で活用されていない問題があります。また、まちには景観を阻害するような看板や高いビルが見受けられます。歴史的風致維持向上計画ではそういった都市の作り方を考え直し、人々の活動と歴史的な都市空間をセットにすることで実質的な意味で歴史的なものの保存・活用を考えるための計画であり、第1部事業紹介ではその方向性を示していただきました。

岡崎市に何度も来ていているアトキンソンさんから見ると、岡崎市の歴史観光には多様性が必要で、しかも近隣のお客さんだけではなく遠方からのお客さんを呼ぶべきだとのこと。確かに我々に置き換えて考えてもヨーロッパなど遠くへ旅行する時は、エコノミークラスではなくビジネスクラスで行きたいという声を聞きくように、遠方からの観光客に対する見方を変えた方が良いのではないかと思います。アトキンソンさんは岡崎市をご覧になり、観光客誘致に対する可能性やポテンシャルについてどうお感じになりますか。

アトキンソン氏

まず日本の観光のポテンシャルについてです。総理が議長を務めている「未来の日本を支える観光ビジョン構想会議」というものがあり、私は委員として参加していますが、この会議における大きな議論のポイントは、日本の観光戦略の問題点は、発信の問題なのか、それともコンテンツを磨く問題なのかということです。私は、磨く必要があり、磨いて発信すれば効果的、磨かないままで発信すると失敗すると考えています。



岡崎市の場合、発信については正直に申し上げますとこの仕事をやり出すまでは、京都や奈良に行くことはあっても岡崎市へは殆どなく、県か市かも知りませんでした。同じように仕事の関係者に明日岡崎市に行くと言うと、岡崎は何県なのかとよく言われます。岡崎市は日光東照宮との関係が非常に深く、全国に関連する東照宮の中では岡崎市に一番初めに来たのですが、東照宮との関わりがあることも知りませんでした。

コンテンツについてはガイドや解説を充実させ磨くことが必要だと思います。これまで日本では解説を設けるといっても、数行程度の薄い内容の説明を数カ国語にしたような解説でした。また解説は建築家からの視点から書かれており、創建年や重要文化財になった年、造りや柱間の長さ、高さといった内容ばかりです。そういった情報は専門家にとっては重要ですが、30万円払って12時間かけてきた観光客にとっては余り重要ではないと思います。観光のポイントは会話で、例えば15カ国語であいさつができたとしても会話が成り立たなければ意味がないように、建築家視点の薄い内容を15カ国語に増やしたところで意味がありません。岡崎市に限った話ではありませんが、できるだけ1人の観光客を考えた色々な工夫が必要です。

私も岡崎市に来る前に岡崎市について少し調べたように、観光を決めるにあたり大体3ヵ月前に予定を決める傾向があるそうです。そういった際に、行事やイベントについて、実施報告の情報しか得られないような発信の仕方であれば観光客にとって親切ではありません。こういったことを少し工夫すれば良い結果が得られるのではないかと思います。岡崎市では建造物に関することは発信されていますが、お祭りや伝統行事といった文化に関する発信が弱いのではないかと感じました。

瀬口先生

飛行機の予約などもあるので3ヵ月前に観光の企画を決める際、行事を確認しても事後の情報が得られるとお話であったと思います。私も30年岡崎市に住んでいますが先日初めて滝山寺の鬼まつりに行こうとした際、新聞で過去に開催された情報しか得られず、開催予定の情報を出してほしいと思うことがありました。今はインターネットが利用できるのも、昔と状況は違ってきたと思いますが、そのような情報発信の方法についても多様性がキーワードになっていると感じます。

しかし多様性と言っても、どんな階層の人に関わらず、観光旅行であれば、3ヵ月前とか時間的余裕を持って決めるといった行動パターンがありますので、そういうことに対するポテンシャルは非常にあると思います。市長さんはその辺どんなコンテンツお考えになりますか。

内田市長

イベントを知るのが大体テレビや新聞で終わってからということで非常に残念に思います。我々は一生懸命、事前にポスターを貼ったりビラを配ったり、旅行会社に連絡をしたりはしていますが、一般の方へのアピールが、これまでは弱かったと思います。インターネットを利用し自分や岡崎市のブログで情報を発信していますが、これからそういったことをもっと積極的に行う必要があると反省しています。

また観光地に解説がないことですが、現在岡崎市は、岡崎城の周辺などではWi-Fiを活用した解説を実施しており、多言語で分かるような整備をしたいと思っています。

岡崎城では、これまで岡崎市の歴史に詳しい人にボランティアでガイドをしていただいていたのですが、今後ボランティアではなく歴史案内人という名称でプロのガイドの養成を目指しています。ガイドを有料にし、お客様に十分ご満足いただけるレベルの内容の観光案内ができるようなシステムを構築していきたいと考えています。



瀬口先生

「信長公のおもてなし」というテーマで岐阜城は日本遺産に認定されていますが、基調講演のお話では、「日本刀」に対する「SWORD」という解説は説明になっていないとのことでした。多言語で 15 カ国語程書くべきという意見もありますが、メディアなど道具を使えば、詳しい解説を知りたい人向けには金額を高く設定して解説をつけ、簡単に見たい人向けにはガイドブックを 1,000 円位で買えるようにするといった工夫ができると思います。多面的なコンテンツの作り方について、市長さんはどのようにお考えでしょうか。

内田市長

岡崎市は地方都市でございましたので、本講演でもご指摘をいただいたように、観光の面についての意識がとても遅れていると感じています。

私自身も以前、アメリカ人の知合いが来た時に岡崎城に連れて行き、下手な英語で解説した経験があり、日本の歴史についてあまり詳しくない外国人に説明するのは本当に難しいと感じたことがありました。何も知らない人に対しどう理解させるかという観点に立ち、観光案内や解説を整備する必要があると考えており、そういった考えを踏まえ整備するよう担当部局へ指示しています。

アトキンソン氏

「兜」を「HELMET」とするような説明書きが 15 カ国語に増えたところで、外国人観光客に対応した解説になったとは言えません。京都市の観光ホームページが 15 カ国語なので 15 カ国語という例を使っていますが、諸外国は大体 7 カ国語です。この 7 カ国語よりも京都市は倍以上だから凄いという訳ではなく、世界の観光客の 9 割を 7 カ国語でカバーができるという経済合理性から由来しています。

音声ガイドを聞きたい人もいれば、ガイドと一緒に廻りたい人もいれば、案内板を読むだけで良いという人もいれば、ガイドブックを読みながら見学したい人もいます。つまり多様なニーズを持つ人がいます。

ただし問題は、小西美術工藝社の本業の 1 つではありますが、解説を作る際に建物の意味合いなどに関する資料がないことです。

現在小西美術工藝社で修理をしている陽明門の中には、570 体の彫刻がそこに飾ってあるのですが、宮司によると彫刻にはやはり深い意味合いがあるそうです。適当に造られた門ではなく、宗教的な意味合いが位置やテーマ、題材、材料、飾りといった形として具現化されています。修理により 40 年振りに元の形に戻るということで、解説やガイドブックを作ることになったのですが、資料がないという問題に直面しています。

現存する資料は全て頼み神社の方から送っていただきました。しかし、沢山意味合いが含まれるであろう彫刻についての資料には、別の建物で三猿の資料の例ですが「何 cm×何 cm×何 cm、猿 3 体有り」といった内容の記載しかないのです。残念ながら、これは建築家の趣味だと思います。多分文化庁に登録した時の資料だと思いますが、意味合いに関する記述がないのです。陽明門を全部解説した本もありません。大学の先生や詳しいマニアの人達の知恵を貸りながら 1 個 1 個解説を作ろうとしていますが、本当にできるかと疑問に思うほどです。

このように、ガイドを作ると言うのは簡単ですが、その中身をどこから引用するかが問題です。今の若い人は日本文化を知らないと言われますが、勉強したくても勉強ができる資料がないのです。こ

れから作らなければいけないので、是非、岡崎市の方でもそういった意味合いに関する事柄を徹底的に調べていただきたいと思います。

瀬口先生

若い頃に「建築に棲む動物たち」という写真集を作ったのですが、その時に日光東照宮も行き著名な彫刻だけ写真を撮りました。私のように建築を専門とする人にとって、建築についている彫刻は建築の王道ではありませんが、今のお話では、観光客など一般人からみるとむしろ建物よりも彫刻に関心を持つ人が多い可能性があるということだと思います。

アトキンソンさんの助言があったからかもしれませんが、日光東照宮に解説ができたということ最近インターネットで見ました。岡崎市内の神社・仏閣にも動物や人物の彫刻がありますが、説明があると、神道や仏教、建築の装飾や建築の様式について詳しくなくても、面白く思っただけなのではないでしょうか。例えば、学生に向けて、大樹寺や「欣求浄土」について色々説明せずとも、岡崎にある歴代将軍の位牌の高さは将軍の身長と同じということを言うと、すぐ覚えてくれます。このようなコンテンツの作り方について市長さんの考えを教えてください。

内田市長

大樹寺の位牌堂は、岡崎市にとって本当に大切な財産です。東京からお客さんが来た時は、必ず連れていきますが、口には出しませんが顔を見てみると、なんでこんな田舎にこんな物があるのかという表情をします。14代の将軍の位牌を全部揃って持っている訳ですから、そういう貴重な物を上手にアピールする必要があると思っています。

歴史的な問題を、歴史の知識のない人に、最初から完璧に正確に理解をさせることは難しいと思います。そこで僕が良く使う手として、キリスト教文化の中で育った西洋社会から来た方に対しては、ローマ史に出て来る有名な戦いなどの例えを交えながらイメージとして頭に浮かぶ様に解説をします。正確な歴史については本人に後で勉強してもらうにしても、イメージを掴んで帰っていただき、それがキッカケとなって日本や岡崎に興味を持っただけならば、僕は第一歩として成功なのではないかと思います。そういったところから、まず岡崎市は始めていく必要があると思っています。

瀬口先生

乙川リバーフロント地区整備計画で彫像を作っているようですが、なにか関係があるのでしょうか。

内田市長

リバーフロント構想は、彫像ばかり作り金を使い過ぎであるといった批判が一部にあります。岡崎市の予算だけではなく、国と交渉し予算をいただく工夫をしながら整備を進めています。いい加減な物を作っている訳ではなく、岡崎市の歴史に大変関わりの深い徳川家康公と、四天王とよばれた江戸時代を作り上げた中心の人達の石像を、三河武士団の象徴として作っています。

石工業は岡崎市の伝統産業の1つですが、最近作る品物も少なくなりお墓を作らない人も近年増えています。昔のように灯籠や石の彫像を愛でる人というのもしなくなりました。こういう状況下において伝統技術を伝承するために、高度な技術を要する作品の制作として四天王像を提案してきました。嬉しいことに、実際に製作現場で親方の一人から若い石工が普段の作業の時とは全然目の色が変わっ

ているということを聞かされました。非常に高度な技術を要する作品を、貴重な石材を使用して作製しているため、いかに完璧に作り上げるかを議論し真剣に取り組んでいる、こんなことは久しぶりだと、こういう仕事がないと伝統技術は伝承できないと言われました。我々政治家は石工業に限らずあらゆる分野で、自分の仕事に対してプライドが持てる仕事を作り出す手伝いをするのが大変必要であるとその時思いました。

まもなく記者会見で発表いたしますが、岡崎に戻り「徳川家康」と改名した頃である 25 歳の徳川家康公が馬に乗った騎馬像を、東岡崎駅前に作りたいと考えています。これは静岡市や浜松市には立派な像が建っているのに、徳川家康の生まれ故郷である岡崎市の駅前には何もないではないかと子どもの頃からと言われ、本当に悔しい想いをしてきたことから、自分が市長をやっている間に、なんとしても解決したいと昔から思っていたことです。しかも役所が簡単にお金を出し作るような代物ではなく、岡崎市民の皆様方から、子どもが自分のお小遣いの中から 10 円ずつでも出しあうような、本当の意味での市民の象徴というものを、駅前に是非作りたいと思っています。そういったものが今私が進めている政策の中の家康の騎馬像であり、四天王の石像です。



乙川のリバーフロント計画では、そういった石像を観光のポイントに置き、駅前の再開発から、河川環境の整備、川の水面などを活用します。そうしたものを繋げる道具として、人道橋という表層が木彫の伝統を大切にした橋を設けることで、駅前と中心市街地の動線を作ります。その先に岡崎公園と岡崎城があるようにするのがポイントです。

しかしただ形を作れば終わりではなく、設備を使って何を行っていくかというのが、一番大切であると考えており、ソフトの事業を含めた計画を練っています。昨日も街中の活性化のため若い人達を交え議論を行いました。そうした取組みを推進していこうと思っています。

瀬口先生

岡崎市の文化・歴史として、御影石を使った石像を伝統工芸技術と合わせて保存するというお話を市長さんより伺いました。歴史市的風致維持向上計画の場合は、建造物だけではなく、建造物にまつわる祭りや生業をセットにして保存や伝承していく考え方ですので、例えば乙川沿いの石垣や人道橋の先にある籠田総門などといったものは保存しながら活かすような取組みをしてもらえると良いのではないかと思います。



次に、岡崎市は日本遺産の登録に向けて取り組んでいるとのことで、日本遺産の制度についてお聞きしたいと思います。日本遺産は、建造物など物の整備よりも、その中身となるコンテンツや発信の仕方を考え、充実させることが目的ですが、その辺を紹介していただけませんか。

内田市長

去年は徳川家康公の 400 年祭ということで、関連する静岡市・浜松市・岡崎市の 3 市連携で様々な事業を 1 年間にわたり取り組んできました。日本遺産につきましては、去年静岡市が単独申請しましたところ残念ながら認定されませんでした。3 市連携して日本遺産の認定を再度目指したいという話を静岡市よりいただきましてそれは是非良いということで認定に向け進めているところです。1 つの三河武士団が徳川家康を中心に勢力を伸ばし、最終的に日本を統一して平和な日本国家を築くといった過程や、今日に続く日本の文化や日本人の生活習慣、日本人の性格といった基礎が作り上げられた過程を、1 つのストーリーとして繋ぐような内容を考えています。

瀬口先生

アトキンソンさんに日本遺産の趣旨や岡崎市で認定の可能性があるのか、コンテンツをどのように仕上げていくべきかなどについてお話いただきたいと思います。

アトキンソン氏

日本遺産は去年から始まった制度で、認定期間は 3 年間です。最終的に数百件ほど認定されると言われていますが多分 100 件位に落ち着くのではないかと思います。世界遺産とは全く異なり、イギリスのイングリッシュ・ヘリテッジ (English Heritage) という制度の日本版として日本遺産 (Japan Heritage) ができました。

下村・元 文部科学大臣がこの制度を作ろうとした時には、文化財はあくまで「物」として考えられ、「物」として保存されてきました。しかし、それでは「物」の意味が分かりません。そこで、文化財を説明する必要性を自治体に考えてもらい、そういった考えを踏まえた整備を応援する趣旨で発足した制度です。

ボツンと建物が建っているところを見せるのではなく、例えば家康公の生涯の意味合いではなぜ神様になったのか、なぜここにこの建物ができたのか、といったことを理解してもらうために、家康公の生涯などテーマに沿った切り口で、生誕の地やお墓、住居など関連する各文化財を繋ぎ発信する考え方です。日光東照宮を中心として久能山東照宮や東照宮がありますが、各建物にはそんなに大きな違いがなく、実際に行けば何かのお位牌があるなという感じで終わってしまいます。しかしそうではなくて、家康公の生涯を追いながら、生まれた地、生活した建物、江戸時代幕府を開いた場所など、文化財の意味を理解しながら巡るような取り組みです。ある人の生涯に関係する物が実際にあっても、物があるだけでは見に行く人は余り居ませんので、その人物に興味を持ってもらうことによって、関連する場所や建物を自分の目で見て体験したいと思ってもらうことをねらいとした制度です。また、建物や神道に興味がある人だけではなく、文化財を色々な趣味の人達に開かれたものにしようというのが、日本遺産の考え方です。

3 年間の認定期間には日本遺産に関連する事業に予算が付きます。その予算を利用してホームページの作成やストーリー作り、ガイド制度の設置など色々なことに取り組んでいただき、ただ単に建物の創建年や構造だけではなく、文化財の本質を求めようという考え方です。

瀬口先生

今までの文化財行政は保存を中心としたもので、また建築に係る人にとっての関心である、建造物

の大きさや創建年といった内容の解説が中心でした。しかし一般の人は、建造物にまつわるストーリーをみて歴史を学びます。だから漫画家や小説家の方が、文化財に関する説明ができるのではないかと思います。これからは、教育委員会の学校の先生ではなく、もう少し庶民的な感覚を持つ学校の先生や研究者などといった人に参加してもらい、歴史が分かるようなストーリー作りをしてはどうかというか、という提言であったかと思います。

1 通質問をいただいていますので、アトキンソンさんと市長さんに意見を伺いたいと思います。内容は「予算配分や保存、開発について、文化財行政と観光行政のより良いバランスをどう考えるか。」です。お願いいたします。

アトキンソン氏

これには正解がありません。諸外国をみてみますと、イタリアでは文化財の観光活用と保存の両立について約 300 年前から議論されています。エジプトではローマ帝国時代にピラミッドが修理され観光の資源として活用されたとする当時の記録が残っています。ローマ帝国時代であってもどの程度修理をして観光客を呼び、どの程度観光客数を制限して建物に悪影響が出ない様にするかといった議論がありました。このように何千年間も続いている議論です。各時代により観光戦略の資源としての利活用と凍結保存の間を行き来しています。

決定的な答えはありませんが、1 つだけ言えるのは、日本は利活用からは程遠く、冷凍保存に極めて近い取組みであったということです。最近の 6 年間で徐々に、規制をかけすぎず観光への利活用を進める考え方が増えてきています。

ただ、諸外国の文化財施設などの平均入場料が 1,891 円である一方日本は 953 円とされていますが、金額的な敷居がない分、日本は施設に人を入れ過ぎだと思います。人口激増時代では、見せ、覗かせるだけで人をさばくという考え方、勉強を施設ではさせず勉強してから来いという考え方が一般的でした。修学旅行は事前に勉強して、次から次へと違うところに見に行かせるというのが今までの考え方でした。そういった考えにより、大量に入場者がいます。

それが果たして良いのでしょうか。欧州では少し入場料を上げて内容を密にし、ひいては人を少し制限してこうとする考え方で運営しています。だからこそ、1,891 円という金額なのでしょう。例えば二条城などでは全然興味なさそうな人を含め沢山の人が来いますが、建物にとっても良いとは思えませんし、もう少し入場者数を制限して、質を高めると良いのではないかと思います。日本遺産という制度は、そういった狙いもあるのかも知れませんね。



瀬口先生

市長さんはどうお考えでしょうか。

内田市長

今の意見には基本的に賛成ですが、観光は必ずしも学びではなく、日本人の観光の仕方を考えると、例えば庭園などに行き、製作者など理屈を色々知るよりもその雰囲気を楽しむという様な観光の仕方があります。岡崎市としては勿論、不足しているガイドや案内表示の整備を推進したいと思っておりますが、そういう観光の仕方もあるのではないかと思います。

それから、岡崎市では観光を産業の1つとして、岡崎の経済の柱に育て上げたいという想いがあります。

また、岡崎市には国指定文化財の建造物が、なんと13あります。名古屋より多い数です。ところが、文化財の近所の住民に言ってもそのことを知っておらず、残念に思うことがあります。私達が豊かさを求めて邁進してくる中で、忘れてしまっている故郷の歴史、自分の足元に眠っている歴史的な文化資産を、もう一度振り返って地元の人に学び知っていただきたいと思っています。そして岡崎市に生まれ育った子ども達が、自分達の故郷の真実の歴史や自分達の先達が成し遂げた偉大な歴史的な偉業というものに対してもう一度目を開いて知っていただき、故郷に対してより大きな愛情と誇りを持つてほしいと思っております。

アトキンソン氏

多様性の話に戻りますが、解説を求める人もいれば求めない人もいます。例えば、仏教の仏閣についていえば色々な仏像があり良く分からないことがあります。これには説明が必要です。禅寺では説明が難しくなることや宗教的に説明を好まないといった禅のお坊さんの傾向もあり、全て解説をすれば良いという訳では当然ありません。ご指摘の通りさまざまな観光の仕方があって良いと思います。しかし、解説がないところでは、何もなかったことを楽しむ人は来ますが、解説して欲しい人は来ません。解説があれば、解説などどうでも良いと思う人は無視すれば良いだけで、解説して欲しい人も来ます。多くの選択肢があった方が、人が集まりやすいということを強調したいです。

また、桜一色というのは止めてもらいたと常々思います。乙川リバーフロント地区整備計画でも全て桜になったら面白くないと思います。これには2つのポイントがあります。最近ある航空会社が海外に発信しているコマーシャルを見ると、京都の花見小路の南側、芸子さん、富士山、新幹線、鮎、お茶、懷石、相撲などワンパターン化されたものを、ガンガン海外に発信しています。しかし、芸さんは8,200万人が来ては対応できず、一見さんお断りで体験ができません。また、人を呼ぶ方の立場に立って考えると、桜の時期は呼ばない時です。というのも、コマーシャルでは誰も人が居ない中で桜が綺麗に舞う場面を発信していますが、実際に来ると、皆わいわいと騒いでいるところで綺麗な桜は見えません。なおかつ宿が取れませんか、桜がいつ咲くかすら分かりません。

そして、桜の開花時期以外の360日は、来なくても結構と言っている様なものです。東京では桜一色なので、開花時期に行かなければ庭園は面白くありません。一方京都はそういう意味では評価が高いです。京都のお庭の造りの特徴として、梅から始まり、桜、ユキヤナギ、桔梗、萩など四季を通して見るものがあるためです。京都の川であっても、大体一年を通して見るものがあります。多様性を考えると、桜だ



けに頼るのは、余り良いことではありません。乙川リバーフロントでは桜ばかりではなく椿など多様に植えて一年中に見るものがあり、打ち上げ花火的な一過性のものではなくいつ来ても楽しめると思います。

瀬口先生

先ほどの質問にありましたが、文化財の保存と観光という考え方は対立するものではなく、文化財行政が観光に繋がるというのが市長さんお考えであったと思います。観光化を推進しすぎても文化財を痛めてしまうことがあります。文化財を保存だけでなく活用するように日本の文化財行政が変わってきたと思います。歴史的風致維持向上計画は、文化財の保存をベースにして、地域の大切なものを壊さない様に持続的に発展させようという考え方なのですよ。

そういった考え方の中で、今日示唆いただいたのは、多様性つまり呼ぶ観光客にバラエティがあると良いということでした。考えている様には相手は動いてくれてないようです。昨日テレビを見てたら、中国人の観光客は味見をしても美味しくければ買わないのがあたり前だそうですが、日本お客からするとのマナーとして良くないと言っていました。そういった考え方や習慣の違いに対してどうすれば良いのかと思いました。多様性は、各観光客のニーズに合わせてマーケティングすることが求められるのかもしれませんが、バリエーションを増やせば良いということではなく、ニーズに合ったものを的確に提供していくということだと思います。今市長さんは胸元に桜のピンバッジをつけていらっしゃいますが、季節が変わり夏になったら、菖蒲が何かに変わるのでしょうか。

内田市長

桜は、今年の岡崎の市制 100 周年のシンボルマークですので変わりません。

ピンバッジにあるように桜を強調してアピールしていますが、乙川リバーフロント地区整備計画では桜しか植えない訳ではありません。1 人のデザイナーと相談しながら、川沿いの風景に桜が一番効果的にアピールできる植え方を考えて整備したいと思っています。

また、日本の戦後復興の政策の中で、ソメイヨシノが全国で一斉に植えられましたが、ちょうど今全国で、60 年位である樹齢を迎えたソメイヨシノをどうするかという問題が起きています。今後はソメイヨシノ一色ではなく、色々な種類の桜を植えるといった工夫考えていきたいと思っています。

瀬口先生

実は岡崎の城郭の植生は、本多静六という造園家が大正の時に岡崎城の造園計画を立て、岡崎城から見える眺望などを考えて植林がされたそうです。新しく進めるまちづくりではこのような歴史とミスマッチをしない様に進めていただきたいと思います。そういった考え方が歴史的風致維持向上計画に入っています。岡崎市の魅力を磨きながら、岡崎市の文化を見に来ていただくことにつながればと思います。

これを持ちまして 3 部トークセッション/鼎談を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

閉幕あいさつ

岡崎市長 内田 康宏



今日は長い時間に渡り「歴史まちづくり シンポジウム」にご参加いただきまして、本当にありがとうございました。そして、アトキンソンさん、瀬口先生にそれぞれのお立場から、本市の歴史まちづくりに向けて大変貴重なお話を賜り、御礼申し上げるところでございます。

岡崎市のまちづくりにつきまして、様々なお言葉をいただいた中で、特に観光において多様性がいかに大切な要素であるかということでした。これについて私達も決して意識していなかった訳ではありませんが、今日、明確にご指摘をいただきましたことをしっかり肝に銘じて、今後の政策に活かしていきたいと思っている次第でございます。

今日は時間がなく、会場の皆様からのご意見を伺うことがあまりできませんでしたが、岡崎市には「市民なんでも目安箱」を設け意見を受け付けておりますし、またご意見がございましたら、なんなりと市の方にお申し出いただきたいと思っております。

アトキンソンさんにご指摘いただきました1つ1つの問題や、瀬口先生からご提案いただきましたことを受け、今後しっかりと岡崎の観光産業の育成に活かしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

また、本市におきましては、国土交通省の歴史的風致維持向上計画の認定に加え、浜松・静岡と共に文化庁の日本遺産の認定も目指しているところでございます。そして市制施行 100 周年を迎えた夢ある次の新しい岡崎に向けまして、これからも歴史まちづくりの果たす役割や効果を考えて政策を遂行していきたいと考えておりますので、どうぞこれからも、よろしくご理解・ご支援の程、お願い申し上げます。

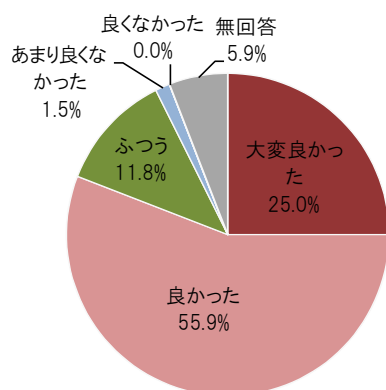
最後になりますけれども、本日お集まりいただきました、皆様方のご健勝とご多幸、そしてまた、今後ますますのご繁栄を心から祈念申し上げまして、私からの挨拶とさせていただきます。どうも今日は、本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

アンケート集計結果

シンポジウムには、172 名の方にご参加いただきました。その際実施されたアンケートには、68 名の方にご協力をいただき、歴史まちづくりに関するご意見をいただきました。

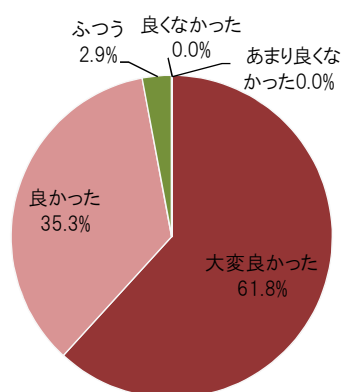
Q1

今回のシンポジウム全体の内容はいかがでしたか？



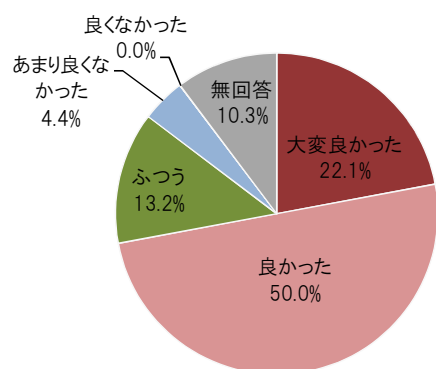
Q2

デービッド・アトキンソン氏の基調講演はいかがでしたか？



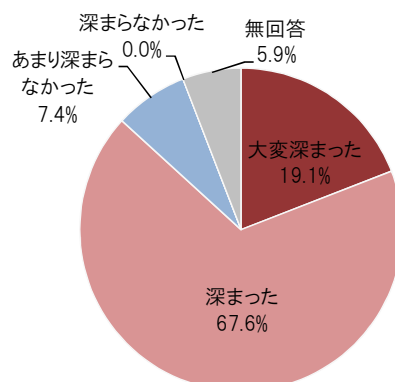
Q3

トークセッション/鼎談はいかがでしたか？



Q4

本日のシンポジウムで歴史まちづくりへの関心や理解は深まりましたか？



今回のシンポジウムへのご感想や、今後の歴史文化資産を活かしたまちづくりへのご意見等がありましたら、ぜひお聞かせください。

アトキンソン氏の講演に対する感想

- ・ アトキンソン氏の話は目からうろこの感じだった。
- ・ アトキンソン氏の基調講演は素晴らしかった。
- ・ アトキンソン氏はさすが国際人、話聞いて感心した。
- ・ 外国人でない外国人のような方の見方が参考になった。アトキンソン氏の基調講演では、日本人の考え方の欠点を巧みに話されたように思えた。歴史まちづくりは日本式で形式にこだわりすぎている。
- ・ アトキンソン氏の講演が素晴らしかった。とても学びになり、岡崎市の政策に生かしていきたいと感じた。
- ・ アトキンソン氏の視点、講演は素晴らしい。これらの考えを岡崎市の今後にどうやって生かすか。どう織り込むか。軌道修正できるか。計画案の見直し、評価が必要だと思う。評価の結果を期待している。役所的な考え方、進め方ではなく、外国人だからこういう見方ができるのか。日本人でもこういう見方の人はいるのか。
- ・ アトキンソン氏の講演により、まちづくりの案内人として考え方が大切であると思った。

市長の話に対する感想

- ・ 学校、地域の人たちに愛着を以ってもらうように、住民全体の意識をいかに醸成するか。

多様性について

- ・ 「多様性」という重要な視点を学んだ。出来事の文化、それぞれの関係性、世界への情報発信など、普段では気づかない部分を指摘され、発想転換の必要を感じた。つまらないものは続かない。楽しむためには仕掛けが必要。歴史まちづくりも官民一体で協働して仕掛けたい。
- ・ 「多様性」まさに多様な見解、考え方も同様。幅広い「民意」も加味した「まちづくり」の展開を期待する。
- ・ おもてなしの中に、多様化の重要性が必要だと思った。

観光客に対するアプローチの仕方について

- ・ 目的意識の重要性や観光客に対してどのようにアプローチしていくのかなど関心を持った。
- ・ アトキンソン氏が言ったように、日本語表記の説明を外国語表記に加えることをOIAの窓口に申し出たが、「ここは関係がない」というようなことを言われた。岡崎市には、家康検定もあり、外国語の堪能な方たちはたくさんいる。ボランティアでお手伝いしてくださる方もたくさんいると思う。一度見直されてはどうか。岡崎市には外国人もたくさん住んでいる。そういう方たちに外国人の目から見た岡崎のどういったことが知りたいかアンケートを取るなど、いろいろ考えればたくさん出てくる。

歴史的資産の活用について

- ・ 岡崎市も、まずは文化財解説磨きから始めるべきだと思った。
- ・ 観光(良いものを見せる)でなく、感幸(歴史をして感動する)にする。
- ・ 重要な岡崎城以外にも、目を向けてほしい。
- ・ アトキンソン氏の言った家康やその他の歴史の本質、家康の生涯やその他のいわれの本質を元として観光を考える。また、客の目的に合わせた目線での案内やガイドをすべきという話は大変ためになった。客目線で、ストーリーを入れたものにすべき。行政の反省が必要。受け入れる人の反省が大いにあると思う。最近ヨーロッパに行ってきたところなので、強くそう思った。

まちの整備について

- ・ まちなかの緑と調和した文化遺産が歴史を感じさせる。自然を残しながら整備をしてほしい。
- ・ 調和のとれたまちづくりをお願いしたい。岡崎城のすぐ近くに高層マンションが連立することがないように。
- ・ まちなかの乙川沿いの景観のために、建築の高さ制限をする、まちづくり条例が必要ではないか。
- ・ アトキンソン氏の講演、とても興味深く面白かった。市長の考えも実際に聞いて良く分かった。歴史文化資産が豊富な岡崎市なので、人を呼びこむことはできると思うが、来た人が便利に動く交通や宿泊場所が全く整備されていないように思える。こういうシンポジウムが何回も開かれて、多くの市民が参加できるのいいと思った。